

一聞いて一だけをして日向ぼこ

藤田湘子

歲月とともに人の嗜好や理解力は、経験によつて少しずつ変化する。

私の若い時は「一聞いて一だけ」しか出来ないとは何と融通の効かない愚か者よと蔑まれた。そこで、言われる前から相手の気性を感じし、一步引きながら後ろから支えるくらいの器量や行動力を良しと考えた。

ところが、ふと思ひ当たつて立ち止まると、それらは余計なお世話。人によれば助力を迷惑とさえ考える輩がいると分かり、頼まれないことは何も手出ししないことにした。否、三度頼まねければ固辞することにした。

一意専心。そして、後は優雅に冬の浮雲でも眺めながら日向ぼっこでもするのが、当世の私の処世術である。

1984年 (s59.11作) 第七句集『去来の花』 鑑賞・轍郁摩